

大麦管理情報 (第6号)

令和7年3月28日
農業技術課広域普及指導センター

1 気象経過

- ・3月中旬は平年に比べ、平均気温は7.0℃（平年差±0.0℃）、降水量は64.0mm（平年比122%）と並、全天日射量は11.2MJ/m²/日（同92%）と少なかった。
- ・3月5半旬は平年に比べ、平均気温は14.7℃（平年差+6.9℃）とかなり高く、降水量は0.0mm（平年比0%）とかなり少なく、全天日射量は16.4MJ/m²/日（同127%）とかなり多かった。

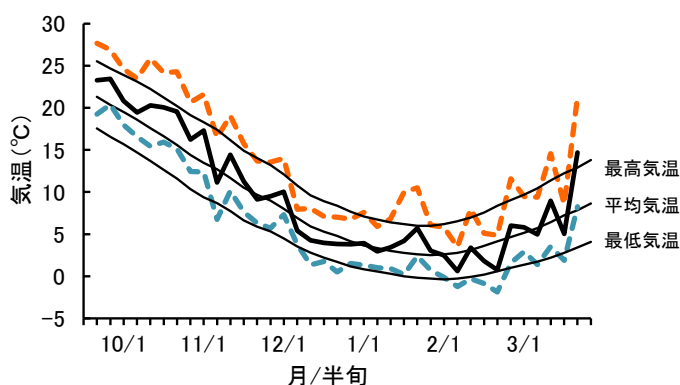


図1 気温の推移（富山地方気象台）

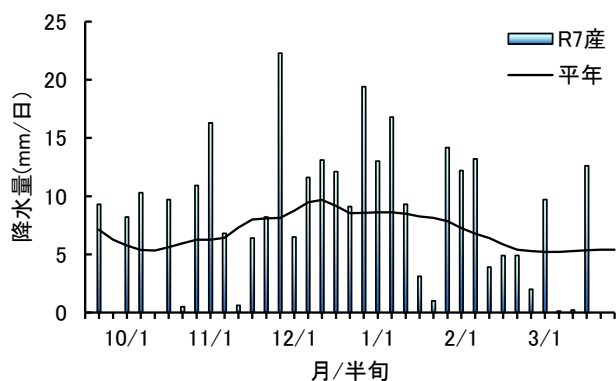


図2 降水量の推移（富山地方気象台）

2 生育概況

- ・平年に比べ、草丈はかなり短く（平年比73%）、茎数は多く（同114%）、葉齢の展開は並（平年差+0.2葉）、葉色はやや濃く（同+1.4）になっている。また、幼穂長は0.8cmと平年に比べ短くなっている。

表1 大麦の生育状況（3月28日）

年産	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長 (cm)
		(本/株)	(本/m ²)			
R7産	25.4	4.2	715	12.3	44.3	0.8
R6産	32.4	3.8	589	12.9	42.5	1.7
平年	34.7	3.6	630	12.1	42.9	1.9

注) 調査は場数：10、播種様式は全てドリル播き、平年はH27～R6年産の平均値

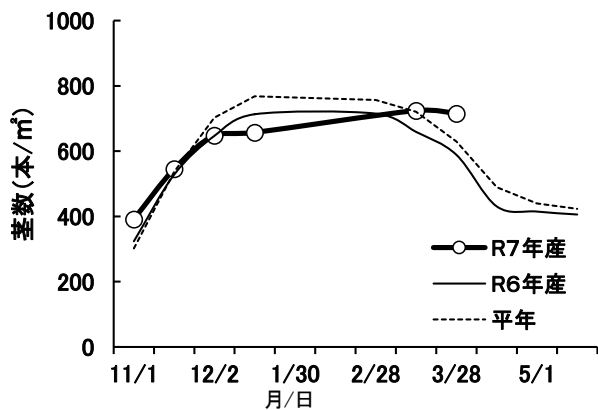


図3 茎数の推移

注) 平年はH27～R6年産の平均値

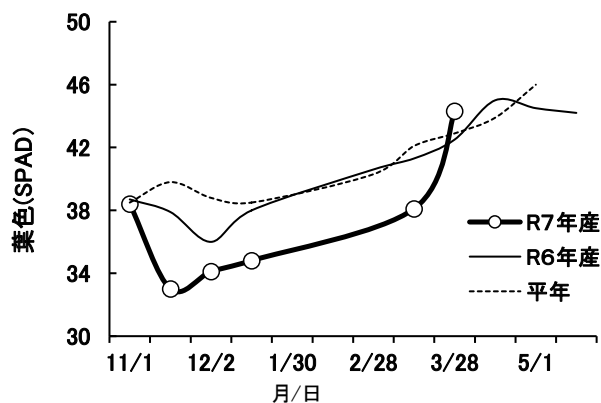


図4 葉色の推移

注) 平年はH27～R6年産の平均値

3 当面の技術対策

(1) 排水対策

- ・出穂後の登熟条件を良好にするため、再度、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底し、根の健全化を図る。
- ・水稻作業が始まると用水や隣接田からの漏水の可能性があるため、水口や畦畔を点検し、湿害を確実に回避する。



図5 隣接田から漏水しているほ場

(2) 止葉展開期追肥

ア 肥効調節型基肥栽培

- ・肥料成分の溶出が登熟後半まで続くため、追肥は行わない。

イ 分施肥栽培

- ・止葉展開期追肥は、生育量に応じて遅れずに施用する。

表2 分施肥体系における止葉展開期の生育と追肥量の目安

葉色 葉色板	予想穂数 (m ² 当たり)	窒素追肥量 (10a当たり)
5未満	500本未満 500本以上	2kg 1～2kg
5以上	500本未満 500本以上	1kg 追肥しない

注) 葉色板の5はSPAD値で「45」

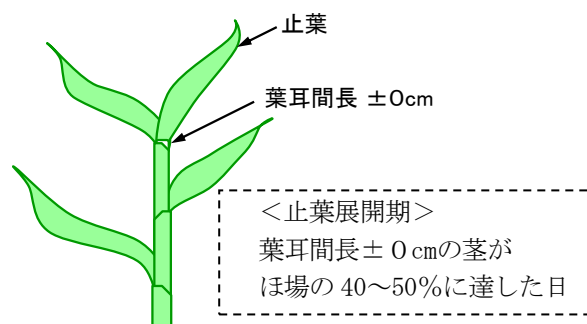


図6 止葉展開期の様子

(3) 赤かび防除の徹底

- ・今後、気温が平年並で推移した場合、止葉展開期は平均で4月7日（平年：4月4日）、出穂期は平均で4月18日頃（平年：4月15日）と予想される。また、気温も変動が大きいと予報されていることから、生育状況を確認しながら、赤かび病の防除作業が適期に実施できるように準備する。
- ・地域やほ場による生育ステージの差が大きいことから、必ずほ場ごとの出穂状況を見極め、最も効果的な防除時期の穂揃期（開花始め）とその7日後の2回防除を、晴れ間を利用して、確実に実施する。

表3 幼穂長に基づく止葉展開期と出穂期の予測日

年産	3月28日時点の 幼穂長 (cm)	止葉展開期 (月/日)	出穂期 (月/日)
R7産	0.8 (0.3～1.8)	4/7 (4/4～10)	4/18 (4/15～21)
R6産	1.7 (0.9～2.7)	4/2 (3/30～4/6)	4/12 (4/10～16)
平年	1.9	4/4	4/15

今後の気温が平年より高い
場合の出穂期の予測日

平年差	+1℃
出穂 予測	4/16 (4/13～19)

注1) R7産は、今後の気温が平年並（H27～R6）に推移する場合の予測日（H18年農研の予測式を用いて、幼穂長から算出）

注2) () 内は、幼穂長及び生育ステージの予測日の幅を示す。

注3) 平年はH27～R6産の平均値

- ・防除効果は液剤の方が高いため、特に1回目の防除は、可能な限り液剤を使用し、規定量の薬剤が確実に付着するように散布する。
- ・防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。
- ・無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。

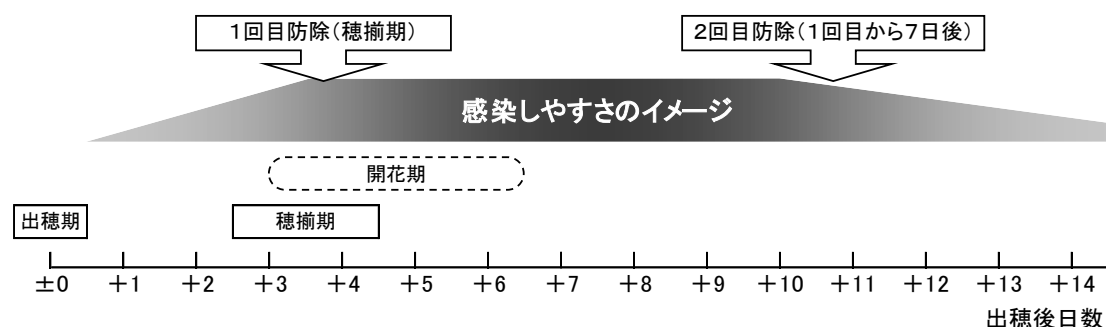


図7 赤かび病の感染しやすいイメージ

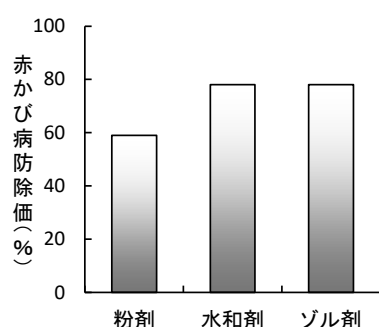


図8 トップジンMの剤型による
防除効果の違い
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

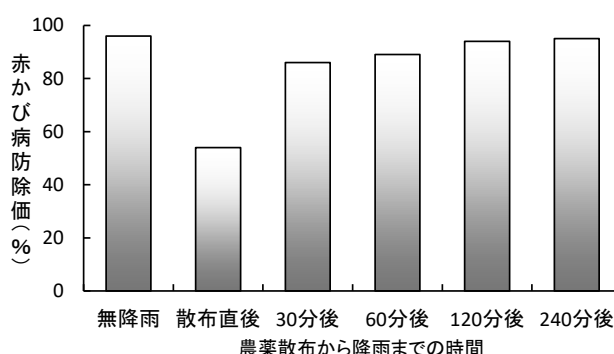


図9 農薬散布から降雨までの時間の影響

注) 防除薬剤：トップジンM水和剤
降雨は強い雨(25 mm/h)を2時間継続して実施
(農研機構 九州沖縄農業研究センター)

表4 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤 型	薬 剤 名	希釈倍数 (倍)	10a当たり 散布量	使用時期 (収穫前日数)	使用回数	RACコード ※3
1回目： 穂揃期 (開花始め) 2回目： 1回目から 7日後	粉 剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	3回以内※2	1
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	3、DMI
	液 剤	トップジンM水和剤	1,000～1,500	150 L	30日	3回以内※2	1
		トップジンMゾル※1	1,500	150	14	3※2	
		シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	1,000～2,000	150	21	1	
		ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	11、QoI
		ストロビーフロアブル	2,000～3,000	150	14	3	
	(無人 航空機 による 散布)	ミラビスフロアブル	1,500～2,000	150	14	2	7、SDHI
		トップジンMゾル※1	8	0.8 L	21日	3回以内※2	1
		シルバキュアフロアブル	16	0.8	14	2	3、DMI
		チルト乳剤25	8	0.8	21	1	
		ワークアップフロアブル	10～16	0.8	7	3	7、SDHI
		ミラビスフロアブル	8～16	0.8	14	2	

※1 取扱メーカーによっては、適用がないので注意する。

※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。

※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する。
QoI 剤は1作期1回までの使用とする。DMI 剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。